『雲のはたて考（２）』

前田圓（まどか）

序

古今集巻十一恋歌一 484 番に、「夕暮れはくものはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて」という一首がある。(註 1)　古来この歌は、夕焼け雲に向かって叶わぬ恋を嘆いた若者の心情を表現した秀歌として、人々に愛されてきた。同時に、この歌ほどその解釈を巡って異論があり、また解釈が時代によって、これほど大きく変化した例も珍しい。　異論は、「くものはたて」と「天つ空なる人」に関係するものであった。

しかし現在、少なくとも一般的には、前者については、決着がついたかのように思われる。例えば、竹内寛子はこの歌を、「夕暮れどき... 一日のうちで人の心のもっとも甘美に誘われやすいとき、雲の果てに向かって天つ空なる人を恋う。雲居はるか空に向かってはるかな人を恋う」と解する。（註２）　山下道代も殆ど同様の解釈を示し、次の如く述べる。（註３）（下線は筆者、以下同じ）

> 夕ぐれの雲のはてを眺めては、つきせぬ思いをすることだと、これは古今集には珍しい<u>直情の歌</u>である。夕ぐれの雲のはてという、野外の天文気象の<u>実景</u>の中で詠まれていることも、古今集には、あまり他に例を見ない。.....「天つ空なる人を恋ふとて」には、あふれるばかりの<u>感傷</u>があり、いわゆる「古今調」の醒めた詠風から見れば、その点だけでも著しく異色の作である。が、この歌に関するかぎり、その手放しの感傷は、ふしぎに澄み透って静かである。それは無限遠点まで見はるかされるような、このあかねの実景と、決して無関係ではないはずだ。

ただし、山下は、自分とは異なる解釈もあると、異説を紹介した上で、異説に与しない理由をも述べる。

> また「雲のはたて」も、古来説の分かれるところであった。いままで私は「雲のはて」と解してきたが、古くは顕昭の註に、これを「雲の旗手」と読み、旗の手のやうにおびただしくひろごりて、夕日の空にまがひて、ゆうひやけするなり。然るに、雲はつきせぬものなれば、つきもせずにものを思うこころにもよめり、とした解釈がある。現代でも、たとえば小沢正夫氏（小学館日本古典文学全集　古今和歌集）は、夕空にはためく旗の形の雲のように、私の思いは乱れている、と現代語訳しておいでになる。窪田空穂（古今和歌集評釈）は、「雲のはて」を取り、私もそれに従う。この歌にとっては「雲のはたて」の遠さは、決定的な要件だと考えるからである。

山下は、小学館の『古今和歌集』の小沢の註を引用しているのだから、小沢の旗手説に反対するのなら、その理由をもっと正確に述べるべきであった。

さらに、山下は古今集 819 番を引いて、484 番と比較して論を続ける。

.

(484 の)　遠い雲のはてを眺めやる構図も、さきの「葦辺より雲居をさして行く雁のいや遠ざかるわが身悲しも（819）」によくにている。しかし、こちら(484)は、正述心緒の詠風、ひたすら直情のみで詠みあげられた歌である。この夕景のあかねの色は、作者の一途な感傷によって染め上げられたものか、と思われるほどだ。ここに比喩というような間接表現の入り込む余地はない。

以上の山下の理解と解釈は、現時点での 484 番にたいする歌人･評論家を含む一般人、及び中世和歌の専門家達の見解を代表するように思える。

古語辞典は、例外なく「はたて」は「果たて」であって、果て・限りの意味であるとし、用例として古今集 484 番の一首を記載する。

さらに、現代の専門家や注釈者も、挙って「果たて」説を取る。古今集のいくつかの歌に関する諸説は、学燈社「国文学」1995 年 8 月号で、<諸説整理･古今和歌集名歌解釈>の項に纏められているので、それを転載する。484 番は小林一彦の担当で、小林はおよそ次のように述べる：

「雲のはたて」関しては「雲の旗手」説と、「雲の果て」説、「蜘蛛」説の３説がある。「蜘蛛」説は論外。古註は圧倒的に「旗手」説、最近の註は概ね「果て」説を採る。ただし現代でも小沢正夫校注の日本古典文学全集が、唯一古注に従って、古歌らしい具体的なイメージが思い浮かぶ「旗手」説をとる。一方、「天つ空なる人」については、手の届かぬ人か、高貴な女性かの決め手は現在のところない。

以上のように諸説を紹介した後、小林は、484 の一首を、「夕暮れ時には、雲のはてを物思いに沈みながらぼんやりと眺めやることです。天上の人のような、手の届かないあの人を恋い慕っているので」と現代語訳をしている。しかし、小林もまた、折角「旗手説」、「果たて説」と、対立する二説を紹介しながら、何故自らが「果たて説」に賛成するかの根拠には一言も触れていない。

「はたて」を「果て」と読む現代の註は、大同小異なので、その中から岩波書店『古今和歌集』(日本古典文学大系　佐伯梅友校註)の「雲のはたてに＝雲のはてに向かって」を代表としてあげておく。一方、「旗手」説をとる古註として、山下、小林がともに言及している藤原定家の『顕註密勘』から引く：

夕ぐれのはたてとは、戦いの場、ご即位の時、諸陣などにたつる旗の如くなる赤き雲の夕暮れに立つをば、雲のはたてというなり。旗の手のようにおびただしくひろごりて、夕日の空にまがひて夕焼けするなり。然るに雲は尽きせぬ物なれば、つきせず物を思うこころにもよめり。

一

ここでもう一度、山下の主張に戻る。「果て」説と「旗手」説のどちらに与するかは、要するに、山下や現在の注釈者たちのように、「くものはたてに物ぞ思ふ」を、雲の実景の歌と考えるか、それとも雲のはたてを心情を託す序とみなすかの問題に帰結するからである。然らば、484 番は、果たして、山下が万葉集での部立の用語を使って言うように、「正述心緒の詠風」、「ひたすら直情のみで詠みあげられた」歌だと言い切れるだろうか。

周知のように、万葉集の巻十一・十二では、相聞歌を、表現法の違いに従って、「正述心緒」と「寄物陳思」という二つの下部概念で区分している。しかしこの二つの差は時として極めて微妙で、厳密に分別することは困難である。次に引用する 5 組の万葉集の相聞歌では、（ａ）は「正述心緒」の歌、事物に託さずに心情を真っ直ぐに述べ、序詞・比喩を用いないものである。それに対し、（ｂ）は「寄物陳思」、心情を事物に寄せて開陳するもので、事物は比喩的、あるいは心情を託す機縁として働いている。繰り返しになるが、（ａ）（ｂ）ともに、殆んど同一事物が詠みこまれ、一首での事物の扱い方は近似していて、その微妙な差異を弁別することは容易でない。実際、時には編者自身が混乱をきたして、全く同一の歌を「正述心緒」「寄物陳思」の両方に掲げている場合さえある。(註４)

1 (a) 振分の髪を短み青草を髪に結くらむ妹をしそ思ふ（2540）
(b) 妹が髪上竹葉野の放ち駒荒びにけらし逢はなく思へば（2652）
(c) 馬の音のとどともすれば松蔭に出でてそ見つるけだし君かと（2653）
（d） 君に恋ひ寝ねぬ朝明に誰が乗れる馬の足音そ我に聞かする（2654）

2 (a) 思わぬに到らば妹が嬉しみと笑まむ眉引思ほゆるかも（2546）
(b) 燈 の影にかがよふうつせみの妹が笑まひし面影に見ゆ（2642）

3 (a) 吾妹子が夜戸出の姿見てしより心空なり地は踏めども（2950）
(b) この山の嶺に近しとわが見つる月の空なる恋もするかも (2672)

4 (a) あかねさす日の暮れぬれば為方を無み千遍嘆きて恋ひつつそ居る (2901)

(b)　思ひ出でて為方なき時は天雲の奥処も知らず恋ひつつそ居る　(3030)

５　(a)　淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情もしのに古思ほゆ　(266)
(b)　相坂をうち出でて見れば淡海の海白木綿花に波立ち渡る　(3238)

夫々の組には、(１妹の髪、２妹の笑み　３妹の姿･月　４日暮れ･天雲　５千鳥･浜木綿)と、心情を託すべき事物、あるいは心情を惹き起す事物が詠み込まれている。

青木生子は、「正述心緒」を、事物の介在の度合により三つに分類する。（註５）　第一類は、「玉響に昨日の夕見しものを今日の朝恋ふべきものか（2391）」と、物をかりずに心緒を直に述べるものとし、第二類には、「白栲の袖をはつはつ見しからに斯かる恋をも吾はするかも(2411)」の如く、物は詠みこまれているが、それは心緒の生じるに至る原因･結果としての物で、心緒の正述のために不可欠であるとする。さらに、第三類として、物を通して作者の環境･行為までも細密に描写する例に、「朝影にわが身はなりぬ玉耀るほのかに見えて去にし子故に(2394)」を挙げ、ここでは物は具体化されているが、これもやはり、「正述心緒」の歌であるとする。この歌が「寄物陳思」にも分類されていることは前ページの註で述べた。(註４)　一類から三類へと移行するにつれ、心情表現が事物に依存する度合いは、「玉響」→「白栲の袖」→「朝影」と増し、物のイメージはより鮮明となる。

１の（ｃ）での馬の足音は、青木生子が、「作者の環境･行為を丁寧に写実することによって心情を直叙」しているので、「正述心緒」の第三類に属するとしているが、万葉集の編者は、(c)、(d)共に、「寄物陳思」に分類している。　１（ａ）2540 も、「寄物陳思」の歌と紛らわしく、「髪の描出が一首の半ば以上占め... 下句を圧倒しているが、これは妹の物及び状態の直写で、吾の嘆きや妹によせる思いそのものと同一者なので正述心緒歌と見做しうる」と、青木が言っている歌である。　２では、(a)の修飾語を伴わない恋人の笑みよりも、(b)の燈に耀う笑顔がより具体化されており、３の(a)の「心空なり」よりも、(b)の心緒の外部から導入され手の届かない月のイメージを付与された表現、「月の空なる恋」のほうが、聞き手の心により鮮明な像を結ばせる。

そして、４ は、(a)、(b)ともに、主想とそれらが与える印象が、古今集の問題の 484 番に似てはいないか。いま仮りに、484 番を、(a)のような「正述心緒」の歌と解釈すれば、「雲の果て」説が出てこようし、(b) のように「寄物陳思」の歌と読めば、「雲の旗手」という外物を介在させて心を詠む比喩説が出てくるのである。

二

そうだとすると、そもそも、484 番の詠み人知らずの作者自身は、この歌を「正述心緒」、「寄物陳思」のどちらで詠んだのであろうか。次に、この歌は、古今集の撰者、あるいは同時代の歌人たちによって、どう読まれていたのだろうか。さらに、古今集よ

り後代の歌人、そして古註の著者たちに、この歌はどう解釈されていたのだろうか。それに対する答えは、先ず、484 番が、古今集のどこに、どういう風に配列されているかを調べれば、自ずからその輪郭を現すと思われる。

古今集巻第十一恋歌一は、冒頭のかの有名な４６９の歌、「郭公(ほととぎす)なくや五月(さつき)のあやめぐさあやめも知らぬ恋もするかな（詠み人知らず）」で始まり、次に素性法師、紀貫之、藤原勝臣、在原元方、壬生忠嶺、凡河内躬恒、と撰者たちの 13 首の歌が続く。その後に、今度は６９首もの読人しらずの大歌群が来る。484 番は、その大歌群の第二番目に位置している。恋歌二以後が、専ら選者や六歌仙の歌で構成されているいるのと異なり、恋歌一には読人しらずの歌が圧倒的な多数を占めているのが特徴である。次に、484 番を挟む七首を掲げる。

481　初雁のはつかに声を聞きしより中空(なかぞら)にのみ物を思ふかな　(凡河内躬恒)
482　逢ふことは雲居(くもい)はるかになる神の音(おと)に聞きつつ恋ひわたるかな　(貫之)
483　片糸をこなたかなたに縒りかけてあはずはなにを玉の緒にせむ　（読人しらず）
484　夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふ天(あま)つ空なる人を恋ふとて　（読人しらず）
485　刈菰(かりこも)の思ひ乱れて我恋ふと妹知るらめや人し告げずは　（読人しらず）
486　つれもなき人をやねたく白露のおくとは嘆き寝(ぬ)とはしのばむ　（読人しらず）
487　ちはやぶる賀茂のやしろの木綿襷(ゆふだすき)ひと日も君をかけぬ日はなし　（読人しらず）

既に繰り返し論じられてきたように、古今集の撰者は、恋歌一～恋歌五で、恋する男女の心理を、恋愛の進行に伴って、恋歌一のまだ噂だけで知りそめた段階の「逢わぬ恋」から、恋歌二の「忍ぶ恋」、恋歌三の「離別を恐れる恋」、恋歌四「恋の破局」、やがて「終わった恋」を振り返る恋歌五と、時間系列に従って配列する。四季の歌と並んで恋歌も、「移り行く万物への時間感覚」をもって詠まれ、詠まれた歌は、選者たちの美意識と言語感覚で選択され、細心に分別され、恋の始まりから終わりまでが、一編のドラマのように、クロノロジカルに再構成されてゆく。

恋歌一に配列された上記の七首では、逢えぬ恋の諸様相が、呼応し、連関しながら、細かく描写される。まだ恋する人に逢いだせないでいる詠み手は、中空(上(うわ)の空)に物思いし(481)、鳴る神の音(噂)だけで恋をし(482)、独り恋する若者は片糸のように心細い思いをし(483)、心は刈菰の如く乱れる(485)。逢えぬ恋人を男は、白露の置くように起きても寝ても恋い慕い(486)、一日も欠かさぬ思いを男は、神官のかける木綿の襷に譬えて、恋人を気にかけぬ（懸けぬ）日は一日も無いと誓うのである(487)。こう読んでくると、これらの歌に挟まれた問題の４８４だけを実景を詠んだ「正述心緒」だと考えるのは、聊か唐突で場違いではないか。それは、スムースに流れてきた楽曲の途中にポツンと、不協和音を一つ投げ込むようなものではないか。そうすることは、原作者の本意に反し、選者たちのこの一首への理解と背馳し、またなによりも、恋歌の配列の意図、

編集の文脈から逸脱することにはならないか。

むしろ、この歌は、前後の歌がそうであるように、恋心を物　(雁・雷･片糸・雲･刈菰･白露･木綿襷)に寄せて詠んだ「寄物陳思」の歌ととるべきではないか。即ち、この歌は作者により、「雲のはたてのように物思いする」と詠まれていると考えるのが正しいのではないか。その考えが正しく、山下はじめ大方の人たちが現在主張しているように、「雲のはたてに物思う」が、雲の果てに向かって物思うという実景を詠んだものでないとすれば、「.....　に～する」という 484 での表現方式は、「.....」のところに譬える物がきて、「に」は「…のように」の意味で、「～する」の個所に動詞(思う･恋する等の心情を表す動詞）が来る万葉集時代より人々に愛好されてきた寄物陳思の方式、あるいは序詞を使う発想・表現形式の一つと解すべきであろう。実例として、万葉集、古今集からこの「寄物陳思」の序詞を含んだものを夫々１０首挙げてみる。

万葉集

100　東人(あずまど)の荷向(のさき)の篋(はこ)の荷(に)の緒にも妹は心に乗りにけるかも　(久米禪師)

266　淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情もしのに古思ほゆ　(人麿)

326　見渡せば明石の浦に燭(とも)す火の秀(ほ)にそ出でぬる妹に恋ふらく　（門部王）

624　道にあひて咲(え)ましししからに降る雪の消(け)なば消(け)ぬがに恋ふとふ吾妹(わぎも)　（聖武天皇）

1412　わが背子(せこ)を何処(いづく)行かめとさき竹の背向(そがい)に寝しく今し悔しも

2166　妹が手を取(とろし)石の池の波の間ゆ鳥が音異(ねけ)に鳴く秋過ぎぬらし

2488　磯の上に立てるむろの樹ねもころに何か深めて思ひ始(そ)めけむ

3238　相坂をうち出でて見れば淡海の海白木綿花に波立ち渡る

4065　朝びらき入江漕ぐなる楫(かじ)の音(おと)のつばらつばらに吾家(わぎへ)し思ほゆ　（山上億良？）

4481　あしひきの八峰(やつを)の椿つらつらに見とも飽かめや植えてける君　（大友家持）

万葉集には、こうした例は、ざっと１２０以上ある。1412 番は、拗ねて背中合わせで寝たことを夫が死んだあと後悔する妻が、「二つに割いた竹のように背向に」寝たと譬え、2488 も、一心に恋う心を「木の根のように懇(ねんご)ろに」と木の根を引き合いにだし、あるいは「舟漕ぐ櫓のようにツバラツバラに（細やかに）4065」と譬えた「寄物陳思」の歌であった。

こうした発想と表現形式は、古今集でも踏襲される。そして、この形式は、万葉集の影響がまだ色濃く残っていた読人しらずが多数を占める恋歌一に、集中的に見出される。最後の二首が恋歌二に、残りは恋歌一にある。

古今集

478　春日野の雪間をわけて生ひいでくる草のはつかにみえし君はも　（忠岑）

479　山さくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ　（貫之）
481　初雁のはつかに声を聞きしより中空にのみ物を思ふかな　（躬恒）
483　片糸をこなたかなたに縒りかけてあはずはなにを玉の緒にせむ　(読人しらず)
484　夕暮れは雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて　(紀友則)
508　いで我を人なとがめそ大舟のゆたのたゆたに物思ふころぞ　(読人しらず)
550　淡雪のたまればかてにくだけつつわが物思ひのしげきころかな　(読人しらず)
562　夕されば蛍よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき　(読人しらず)
566　かき曇らし降る白雪の下消えに消えて物思ふころにもあるかな　（忠岑）
604　津の国の難波の葦のめもはるにしげきわが恋人知るらめや　（貫之）

「.....に～する」は、古今集の恋歌では約 20 例と減少するが、逢えない恋人への思慕の念は、「降る雪のような消えいる思ひ(万･624)」から「かき曇(くも)らし降る白雪の下消(したき)えに消えて物思ふ(古･566)」と、イメージがより色彩豊かになり、「割き竹の背向に（万･1412）」の簡潔な譬えは、「春日野の雪間をわけて生いでくる草のはつかに(古･478)」、とより具体的に表現される。後者では、「春日野の雪間をわけて生ひでくる草の」までの前句が、後半の「はつかに見えし君はも」より優勢で、前半の景が、もう少しで一首の風景歌に結晶しかかっている。とはいうものの、この段階では、歌の前半で物や景を借りてきて、それに擬えて、後半の心情を直結的･直情的に表現する伝統は依然根強く残っていた。

もっと端的に、「.....に物思う」と 484 と全く同じ表現の先行例を見てみる。「.....に物思う」という言回しは、既に万葉集に見受けられる。

『万葉集』
122　大船の泊(は)つる泊(とま)りのたゆたひに物思(も)ひ痩せぬ人の児ゆえに　(弓削皇子)
125　橘の蔭履(ふ)む路の八衢(やちまた)に物をそ思ふ妹に逢はずて　(三方沙弥)
2247　秋の田の穂向きの寄れる片よりにわれは物思ふつれなきものを
3022　行方無(な)み隠(こも)れる小沼(を ぬ)の下思(したもひ)にわれそ物思ふこのころの間(あいだ)
3511　青嶺(あおね)ろにたなびく雲のいさよひに物をそ思ふ年のこのころ

古今集でも、この方式は踏襲される。

『古今集』
481　初雁のはつかに声を聞きしより中空にのみ物を思ふかな
484　夕暮れは雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて
508　いで我を人なとがめそ大舟のゆたのたゆたに物思ふころぞ

566　かきくらし降る白雪の下消えに消えて物思ふころにもあるかな
583　秋の野に乱れて咲ける花の色の千種に物を思ふころかな

以上の例から、「.....に物を思ふ」は、万葉集以来、常に何か物に譬えて、「.....のように」と、心（物思い）を表現する慣用語法であった。従って問題の 484 番の一首も、「雲のはたてのように物思いする」と読むのが正しいということになるのではないか。

三

しかし此処で、直ちに反論がでてくると予想される。　予想される反論の最初は、「雲の旗手」という言い回しは、万葉集にも古今集にも、484 番を除いては見つからないという事実をどう考えるかということになるであろう。第二の反論は、484 の作者と同時代の古今集の詠い手、さらに後代の新古今集時代の詠い手たちまでが、484 を本歌取りした歌を含めて、悉く「雲の果たて」と詠んでいても、「雲の旗手」とは詠んでいないのは何故かを説明せよということになるであろう。

万葉時代の詠み手は、身近な鏡･玉･櫛などの装身具、髪･眉毛といった容貌、袖･帯･紐・裾など衣類に加えて、花･木・昆虫・鳥といった動植物、さらに雨･雪･霧などの気象、山･川といった自然現象･地形まで、森羅万象を自らの歌の中に詠み込んだが、問題の「雲の旗手」という語を用いた例は一つも見付からない。その理由の一つに、万葉人は、雲を詠むこと自体が少なかったことが挙げられるであろう。巻十一･十二の「寄物陳思」を含めて、その他の巻の「...に寄す」で取り上げられた景・物の中で、目立って多いのは、花、鳥、ついで紅葉、鹿の順である。気象現象では、総数は少ないが、雪と露が最も多く、月がそれに次ぎ、雲と雨は少数派である。和歌は、花鳥風月を詠むとよくいわれるが、万葉歌人には、気象現象(風月)はまだ意外に不人気だったのである。その数少ない雲、空（天）詠んだ歌を拾って次に並べた。

161　北山にたなびく雲の青雲の星離り行き月を離りて　(挽歌　持統天皇)
205　王は神にし座せば天雲の五百重が下に隠り給ひぬ　(挽歌)
225　直の逢ひは逢ひかつましじ石川に雲立ち渡れ見つつ偲ばむ　（挽歌　人麿妻）
428　隠口の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ（人麿　土形娘子への挽歌）
688　青山を横切る雲の著しろく吾と咲まして人に知らゆな　（大友坂上郎女）
693　かくのみし恋ひや渡らむ秋津野に棚びく雲の過ぐとは無しに（大伴千里）
698　春日野に朝居る雲のしくしくに吾は恋ひまさる月に日に異に　(大伴像見)
758　白雲のたなびく山の高高にわが思ふ妹を見むよしもがな　(大伴田村大嬢)

1244　乙女らが放の髪を木綿の山雲なたなびき家の辺り見む
1368　石倉の小野ゆ秋津に立ち渡る雲にしもあれや時をし待たむ
1923　白真弓いま春山に行く雲の行きや別れむ恋しきものを
2452　雲だにもしるくした發たば心遣り見つつもあらむ直に逢ふまでに
2453　春楊葛城山にたつ雲の立ちても座ても妹をしそ思ふ
2464　若月の清にも見えず雲隠れ見まくそ欲しきうたてこのころ
2490　天雲に翼うちつけて飛ぶ鶴のたづたづしかも君座さねば
2510　赤駒の足掻速ければ雲居にも隠り行かむぞ袖枕け吾妹
2669　わが背子がふり放け見つつ嘆くらむ清き月夜に雲なたなびき
2676　久方の天飛ぶ雲にありてしか君を相見むおつる日無しに
2816　うらぶれて物な思ほし天雲のたゆたふ心わが思はなくに
3030　思ひ出でて為方なき時は天雲の奥処も知らず恋ひつつそ居る
3031　天雲のたゆたひやすき心あらばわれをな憑め待てば苦しも
3272　.....思ふ空　安からぬものを　嘆く空　過し得ぬものを　天雲の　ゆくらゆくらに
　　蘆垣の　思ひ乱れて.....わが恋ふる　(相聞　長歌)
3325　つのさはふ石村の山に白栲に懸れる雲はわが大君かも　(挽歌)
3326　.....剣刀　磨ぎし心を　天雲に　思いはらかし　(挽歌　長歌)
3344　.....何処にか　君が座さむと　天雲の　行きのまにまに　君に恋ふる　(挽歌長歌)
3510　み空行く雲にもがもな今日行きて妹に言問ひ明日帰り来む　(東歌)
3511　青嶺ろにたなびく雲のいさよひに物をそ思ふ年のこのころ　(東歌)
3512　一嶺ろに言はるものから青嶺ろにいさよふ雲の寄そり夫はも　(東歌)
3515　吾が面の忘れむ時は国はふり嶺に立つ雲を見つつ偲はせ　(東歌)
4247　天雲の遠隔の極わが思へる君に別れむ日近くなりぬ

万葉集時代での雲は、まず何より先に、死者を荼毘に付した煙が溶け込む雲であった。挽歌(161,205,225,428、3325,3326,3344)に天雲が詠まれた所以である。さらに、万葉集での雲は、恋人の姿を隠す望ましくないもの（1244,2464、2669)、別離に繋がるもの（1923,　2510)、人目をひいて逢瀬の障害となるもの（688)、苦しみを触発す

るもの（698,2490,3031）、心をかき乱すもの(698,2816,3511)、移ろい易いもの（3031,3512）など、どちらかといえばマイナス・イメージをもつものが多い。慕わしい恋人に譬えるれるプラス･イメージの花や、鳥と違って、雲が不人気だった理由の一つがここにあると思われる。反対に、雲がプラス･イメージで詠まれている少数例は、巻一 15 番の「わたつみの豊旗雲の入日見し今夜の月夜さやに照りこそ」と、逢えない恋人と雲を重ね合わせる 1368 番、2452 番、3515 番ぐらいであろう（428 の人麿の歌は挽歌なのでここに入れない)。万葉集巻一 15 番の入日に照り輝く豊旗雲と、古今集 484 番の夕焼け雲「山の端に入った夕日が筋のように立ち上って幡のように耀く夕の雲」（東大本聞書註）の二つは、雲を好ましく壮麗なものとして詠んだ稀有の例である。古註『耕雲聞書』も、「豊旗雲に入日みしといふも雲のはたてと同事なり」とこの二つを同一視している。だが、たった二例しかないのは、当時夕雲がプラス･イメージとしては、一般には受け入れられていなかった証左でもある。一方、古今集では、雲は、月ほどまではないが、詠題に取り上げられる機会が増え、雲という概念の内包にも変化が起こる。さらに新古今時代になると、万葉時代にはあれほど不人気だった雲が、侘び･寂びを理想とする時代精神に合致してか、人気を回復するのはいささか皮肉でもある。

四

古今集でも「雲の旗手」と詠んだ例は、484 を除けば皆無である。しかし万葉集の場合と同様、雲、空、夕暮れを詠みこんだ歌がいくつかあるので、それらを手掛りに、484 番の「雲のはたて」は、同時代人の古今集の歌人たちにどう解釈されていたかを推量してみる。古今集は、ふつう、詠み人知らず（809-849）、六歌仙時代（850-890）、撰者時代（891-945）の三時期に分けられるので、関連する歌もその時代順に並べた。

詠み人知らず

484　夕暮れは雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて

488　わが恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行く方もはなし

515　唐衣ひもゆふぐれになる時は返す返すぞ人は恋しき

六歌仙時代

552　思いつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを（小野小町）

735　思ひいでて恋しきときは初雁のなきて渡ると人知るらめや（大友黒主）

784　天雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめには見ゆるものから（紀有常）(註)

撰者時代

601　風吹けば峰にわかるる白雲の絶えてつれなき君が心か（壬生忠岑）

743　大空は恋しき人の形見かは物思ふごとにながめらるらむ（酒井人真）

751　久方の天つ空にも住まなくに人はよそにぞ思うべらなる（在原元方）

古今集でまず目立つのは、上に引用した、雲や空を詠んだ少数の例でも、歌の調子が、万葉集のそれとは随分様変わりしていることである。万葉集では、「寄物陳思」型の歌が、景物をよむ上の句から、心情を述べる下の句へ移っていく際に、比喩を表す「の」や、「に」のところでリズムと流れが一度軽く中断されるものの、意味の連結作用で、一首は最終句に向かって直線的に流れていた。それにひきかえ、古今集では歌の流れは、蛇行し、立ち止まり、やっと辿り着いた終句から、また上の句へ立ち返ってくるといった印象のものが増える。「天雲に翼うちつけて飛ぶ鶴の/たづたづしかも君座さねば（万・2490」と、小休止を挟んで、殆んど一息で憧れを言い切る万葉風の詠み方が、古今集になると変容を見せ始める。古今集の 743 では、「大空は恋しき人の形見かは/物思ふごとに眺めらるらむ」と、恋する自分の心を、一定の距離をおいて眺めるようになる。作者と詠み手の間のスタンスの変化により、万葉人が、大空＝恋人の形見と直截に断定して憚らなかったところを、「形見かは」とわざと疑ってみせ、読者にもここで一呼吸おかせる工夫がなされている。また第五句に「らむ」という不確かな推量の助動詞を使うことで、この歌の作者は、断定を避け、婉曲に屈折した心情表現を試みている。

心情を直截・直線的でなくて、逡巡・屈折して詠みだそうとする試みは、万葉以来愛好されてきた序詞の衰退を惹き起こすことになった。　万葉集では、障碍にあって恋人に逢えない苦しい恋を、「白雪の消えるように心細い」、「刈薦（かりこも）の乱れるように狂おしい」と前半の景に託して、繰り返し詠んでいるうちに、後半の心の表現もまた不可避的に類型化してくる。「妹は心にのりにけるかも」とか、「心消（け）ぬべく思ほゆ」とか、「命死ぬべく恋わたるかも」といった心緒の類似表現がそれらである。苦しい恋、逢えぬ恋、届かぬ思いといった心情表現の固定化・類同化は、今度は、作者側に、自分の心情を個性的にするために、前半の心を託す景物の選択とその景物が心に係わっていく過程で喚起するイメージの斬新さに専ら心を致すことを要求することになる。かくて、マンネリ化した序を色々の形で改変せんとする動きが出てくる。

小沢正夫は、『古今集の世界』で、万葉集時代から古今集時代にかけての、序詞の変遷を詳細な表にして提示している。小沢によると、万葉集 1,750 首中序詞を使ったものは 370 首（21,1%）だったのが、古今集では 1,000 首中 107 首（10,7%）と二分の一に減少する。また万葉では、一般の序詞が主流だったのに、古今では助詞「の」を含む序詞が一般の序詞を上回る。さらに、「なれや」、「み」を持つ序詞などの語法上の工夫が、古今集時代には独自に開発されたと論じている。（註６）

「寄物陳思」が類型化してくる万葉中期以降、序詞を改良する動きは、不可避の趨勢であった。万葉歌人が繰り返し使用しパターン化した類似表現、それは「沫雪（あわゆき）のはだれ」「霍公鳥（ほととぎす）来鳴く」といった上句の景であろうと、下句での心を表す「吾と咲（え）まして人に知ゆな」、「妹は心に乗りにけるかも」といった類似表現であろうと、新しく歌を詠もうとする者は、個性的であろうとするなら、必ず既成の序詞を改良することを要求された

からである。

「蘆垣の中の似児草にこよかに吾と咲まして人に知らゆな（2762）」を本歌として、後半をそのまま使った坂上郎女の新工夫は、「似児草」「にこよか」と同音によって、恋人の柔らかな笑みを似児草の可憐さに託した先人の比喩を、「青山を横切る雲のいちしろく吾と咲まして人に知らゆな（(688)」と、景を似児草から青い山の中腹を流れる白雲に置き換えて、本歌に遜色のない恋人の白い笑顔の鮮烈なイメージを創造したことであった。(註７)

恋人にすっかり心を奪い取られた心境を表す「妹は心に乗りにけるかも」の場合も、「東人の荷向のはこの荷の緒にも妹は心に乗りにけるかも（100 ）」、「秋の野の尾花が末の生ひ靡き心は妹に寄りにけるかも（2242）」と、後半は微妙に語順を変えながらも、前半の物･景(箱の荷の緒、靡く薄の穂)を、自分の感性･個性で選んで譬え変えるることで、ステレオタイプ化した恋する若者の心理に、微妙なニュアンスと彩りを追加することができた。

全く同様に、「恋ひて死ぬとも」のありふれた心理表現も、「荒磯越しほか行く波のほか心我は思はじ恋ひて死ぬとも（2434）」、「朝霧のおぼに相見し人ゆえに命死ぬべく恋ひわたるかも（599）」、「夢にだに見えばこそあらめかくばかり見えずしもあるは恋ひて死ねとか（749）」、「山高みした行く水の下にのみ流れて恋ひむ恋は死ぬとも（古今･494）」と、前句の中に慎重に選ばれた物に刺激されて、下句の心が新しい印象を付与される。中国の『毛詩大序』の六義説でいう、「興」、物が心を（そして歌全体を）引き興すのである。ただ、2434 の「荒磯越し」の歌は掛詞を使っている分、言葉遊びの要素が強く、素朴･直情の類歌とは、かなり印象を異にする。

後期万葉歌人大伴家持の 749、「夢にだに見えばこそあらめかくばかり見えずしもあるは恋ひて死ねとか」の幾重にも屈折した「正述心緒」の歌は、古今集で夢を歌った小野小町の、あの屈折した「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを（552）」と殆んど直接に繋がっている。ただ、ともに無用の修飾語や比喩を省かれてはいるものの、小町の歌では、女性の深い情念が、上句で一度、下句で再度変奏されて、うねるように繰り返されて、「や」「らむ」「せば」「まし」「を」と、細心に選ばれた言葉の中から、女の本源的な哀しみと情念が、立ち上ってくるところが、いかにも小町的といえるのではあるが。

序詞改良の試みは、序の多重化、懸詞･縁語を使っての文脈の複線化となって現れてくる。既に引用した「妹が髪上竹葉野の放ち駒荒びにけらし逢わなく思へば（万葉・2652）」は、二重序の例である。最初の序、「妹が髪上げ」は、「上げ綰く」→小竹葉野（たかはの）とかかり、「.....放ち駒」までが第二の序で、荒れる（荒む、離れる）に懸かる。最初の序が小竹葉野という地名を修飾し、第二の序が、荒れるという用言を修飾し、媒介することで、上句の地名と景が、一首のモチーフである下句の心情と意味上

の脈絡を保っている。

夕暮れ時の人恋しさを詠んでいて、484 の「夕暮れは雲のはたて」と、一見似ているが、序の部分に、万葉時代には見られなかった、そして 484 よりも更に複雑な、技巧が凝らされているのが、古今集 515 の詠み人知らずの「唐衣ひもゆふぐれになる時は返す返すぞ人は恋しき」である。一首は、枕詞「唐衣」から、ひも（紐・日も）ゆう（結う･夕）暮れになるときはと、物名・懸詞･縁語を駆使しながら流れる。そして、最初の唐衣の景（イメージ）は残したまま、夕暮れという別の景(文脈)で一度転じて後句にかかり、ここで文脈は二重になって衣を返す返す（繰り返す、重ね重ね）人は恋しいと結ぶ。唐衣のイメージから恋い慕う相手が上層の女性だという想像まで誘い、単純、直線的読みでなく、複雑で重層的読みと鑑賞を可能にしている。唐衣→紐→夕暮れ→返す→繰り返し→と、序、比喩、縁語、懸詞を駆使して、二つの文脈がもつれ合い、ほぐれて、「返す返すも人は恋しき」までで辿り着いた時の恋人のイメージは、もはや万葉集でのあの直截な、「玉響(たまゆら)に（2391）」、「朝霧の朧(おぼろ)に（599）」見える恋人の顔、「秋萩の撓(しな)いにあらむ（秋萩のようにしなやかな 2284）」恋人の肢体でなくて、言葉の重積、分離、飛躍と再連結の過程で、読む者の想像力の中で組み合われ、やがて像を結んでくる人工の心象風景となるのである。

イメージの場合同様、古今時代の歌は、同じ恋する心を詠んでも、もはや万葉時代のように心を直情的に詠み、かなわぬ恋を嘆くのではなくて、自らの嘆きを一定の距離をもって眺め、それを客観的に表出することを選ぶようになる。恋は私的、特定の個人向けの「相聞(そうもん)」として歌われるのでなくて、社交的な贈答歌、歌合せといった公共の場で、「恋歌(こいのうた)」として詠まれるようになる。万葉集では、多くの場合、恋心の披瀝は、「春日野に朝居る雲のしくしくに吾は恋ひまさる月に日に異に（698）」、あるいは「春されば百舌鳥(もず)の草潜(くぐ)き見えずともわれは見やらむ君が辺をば（1897）」のように、景から心へと、直情的・直線的に上の句から下の句へと一息によみくだされていたものが、古今集になると、「わが恋はむなしき空にみちぬらし/思いやれども行く方もなし（488）」、「大空は恋しき人の形見かは/物思ふごとに眺めらるなむ（743）」、「夕暮れは雲のはたてに物ぞ思ふ/天つ空なる人を恋ふとて（484）」と、三句目で一回切れて、後の句で前句の理由を述べたり、感慨を追加したりする歌が増える。743 番のように、大空＝恋人の形見、と言いかけて、「形見かは」と自省する心を差し挟んで、再び大空を眺める自分の姿を詠み、しかも「らむ」とその心情を一定の距離を置いて客観化する。この歌の返歌 744 番も同じ detachment(距離感・第三者的態度)をもって詠まれている。「逢うまでの形見も我はなにせむに/見ても心の慰まなくに（744）」。形見（景）→役に立たない（心）に、もう一度後半の恨みがましい心理が付加され、「慰まなくに」と助詞「に」で、余韻をも含める修辞が試みられている。

484 の「夕暮れは」の歌も、detachment の歌である。「物ぞ思ふ」と、一字字余りにして第三句で一度切り、「天つ空なる人を恋ふとて」と自分の思いの理由を述べているのだが、終句の「恋ふとて」には、直情の歌にはない余裕がある。若者の恋のモチーフと、読み手の修辞の間には、万葉集にはなかった detachment（客観・余裕の感覚）があり、この一首は、決して恋の高揚の瞬間を直截に詠んだ「正述心緒」の歌とはひびかないのである。

484 を本歌とした歌が、古今集恋歌五の 751 にある。片方は恋歌一、片方は恋歌五と離れていたので、最初は気づかなかったが、この二首は、並べてみるとモチーフといい発想といい、まるで双生児みたいに似ている。ただ、恋心のベクトルの向きは正反対である。

484　夕暮れは雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて
751　久方の天つ空にも住まなくに人はよそにぞ思ふべらなる　(在原元方)

元方歌を最初読んだ時、この歌が詠まれた状況が、よく分からなくて、覚束ない思いがした。この一首単独で理解しようとすると、「天つ空にも住まなくに」と「よそにぞ思ふ」がうまく繋がらなくて、なんとなく腑に落ちなかった。だが、484 と並べてみて、不安定感は、氷解した。751 は正に、484 のパロデイ(捩り)だったのである。

本歌と元方歌とでは、上句と下句では、順序が逆になっている。本歌では、若者が天つ空に住んでいる高貴な女性を、一心に恋していると真面目に詠んだのを、751 で、元方はわざと主意をひっくり返す。自らを恋する若者に擬する少々意地悪の作者は、諧謔めかして、「天上界に住んでいるわけでもない癖に、貴方とは関係ございませんといったあの態度はなんだろう」と、つれない女に悪態をつく。しかし、パロデイとはいいながら、元方が本歌の「雲のはたてに物ぞ思ふ」を、「よそにぞ思ふべらなる」と茶化していることからも、元方が、本歌の「雲のはたてに物ぞ思ふ」を、「くもの旗手のように(みだれて)」物思いすると理解していたことには、疑問の余地がない。

古今集からもう一首、「よそに」が、無縁に(ここでは疎遠に)の意味で使われた贈答歌を挙げる。これも「雲の旗手」説の一傍証になるであろう。

784　天雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめには見ゆるものから　(紀有常)
（返し）　785　ゆき帰りそらにのみしてふることはわがゐる山の風はやみなり　(業平)

この歌には、補足が必要である。詞書によると、在原業平が、紀有常の娘の許に通うが、父の有常には会わずに夕方になると早々に帰っていく。有常が「自分の妻（め）には逢

うが、私には余所余所しい」と詰ると、業平が「うわの空で行き来しているのは、妻の剣幕が恐ろしいからです」と応じた歌である。なお、この贈答歌は、『伊勢物語』十九段に少し変形されて出てくる。(註８)　『伊勢物語』の方が、改作なので、『古今集』に従った。

恋歌が作者の相手に対する心情を、相手と自分の二人きりで直接･直情的に語りかける段階から、第三者を意識して、思いをより一般的に、客観的に表現するようになるにつれ、恋の当事者とその相手(対者)の呼称に顕著な変化が起こる。伊藤博がそのことを『万葉集相聞の世界』で、詳細に調べているので、その数値を借用する。（註９）伊藤は、恋愛の当事者が直接呼びかわす「吾･汝」から、第三者の聞き手を想定した場合の「妹･背」、相手の呼称として男女ともに適用される「君」までを、「直接的呼称」と呼ぶ。それとは別に、相手を「人」と抽象的･客体的に呼ぶ例があり、「人」という表現は､「男女が､実在の対象に向かって直情的に愛を差し向けていく時代にはあらわれず、みずからの内に、恋を屈折させて悩んだり、時には偶像を造形して恋を恋したりする時代にあらわれる（pp.31-32）」とする。後者を伊藤は「客観的呼称」と名付け、万葉相聞歌での使用頻度は、直接呼称である「汝」30、「妹」350、「子」70、「君」380、「背」70 の約 900 例に対し、客観的呼称の「人」は、僅か 50 例（(0.06%）にしか過ぎないと報告している。しかも、単独で「人」と使う例は、「一目見し人」のように修飾語を持つものの 40%で、初期万葉、及び創作年代の古い東歌には一例もないという。

伊藤はさらに続けて、古今集恋歌 360 首では、直接的呼称と、客観的呼称の使用頻度が万葉相聞のそれと逆転現象を起こしていることを数値で示す。詠み人知らず時代：直接的呼称（君 18、妹 1)、客観的呼称（人 45)、六歌仙以後：直接的呼称（君 8、妹 0)、客観的呼称（人 46)。古今集では、直接的呼称は不人気で、客観的呼称「人」の 30%弱だという。

10 ページで引用した九首の古今の歌でも、「人」は、七回も使われており、使われていない残り二首には、「吾恋、吾が心」があるが、言及されていない恋の差し向けられる対象は、もはや「妹」や「君」でなくて、より客観的な「人」であると考えられるので、「人」の出てくる頻度は、100%に限りなく近いのである。作歌の姿勢が、詠みこまれる人物の呼称に端的にあらわれているのである。

五

風巻景次郎は、「八代集四季部の題における一事実」(註 10)　で、八代集での歌の題材の変遷と傾向を調べている。それによると、古今集時代から新古今集時代までを一貫する題材は、梅･桜･時鳥(ほととぎす)･七夕･紅葉･雪である。十一世紀後半の後拾遺集で、題材は飛躍的に増加、立春･霞･蘆･橘･蛍･五月雨･月･鹿･萩と多彩になる。新古今集時代になると、類題の細分化が進み、あるいは季の名を冠したものが目立つ。曰く、朧月夜･春雨･

春霞(春)、衣替え･夏衣･納涼・夕立(夏)、秋月･秋夕･秋風･稲妻･砧(きぬた)･鶉(秋)、冬枯･千鳥・雪解(ゆきげ)･余寒･冬月(冬･春)。現代の俳句歳時記の季語の先駆がここにある。しかし、このように細分化され、多様化した新古今集においてすら、「雲」を詠んだ歌は意外に数少ない。

以下、新古今集で、「雲のはたて」と詠んだ歌、さらに「夕暮れ雲」を詠んだ歌を適宜選び出して、雲や夕暮れのイメージが、新古今時代には、どのように捉えられていたか、そして先行時代のそれからどう変貌していたかを見てゆきたい。新古今時代には、本歌取りがしばしば行われたので、必要なときは本歌を並列した。

863　きならせと思ひし物を旅衣立つ日をしらずなりにけるかな（詠み人知らず）
864　これやさは雲のはたてにおると聞くたつ事しらぬあまのは衣（寂照法師）
　本歌 : これやこの天の羽衣うべしこそ君がみけしと奉りけれ（伊勢物語 16 段）
959　都をばあまつ空とも聞かざりき何ながむらん雲のはたてを（宜秋門院丹後）
　本歌（古今 484）夕暮れは雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて
1081　下燃えに思ひ消えなん煙だに跡なき雲のはてぞ悲しき（俊成女）
1106　詠め侘びそれとはなしに物ぞ思ふ雲のはたての夕暮の空（通光）

608　寒(さ)え侘びてさむる枕に影みれば霜ふかき夜の有明の月　(俊成女)
1107　思ひあまりそなたの空を詠むれば霞を分けて春雨ぞ降る（俊成）
1133　なき名のみ立田の山に立つ雲のゆくへもしらぬ詠(なが)めをぞする（俊忠）
1135　我が恋はあふを限りの憑みだにゆくへも知らぬ空の浮雲（通具）
1142　としもへぬ祈る契りは初瀬山をのへの鐘のよその夕暮　(定家)
1193　有明は思ひいであれや横雲のただよはれつる東雲(しののめ)の空（西行法師）
1249　思ひやる心は空にある物をなどか雲井に相見ざるらん（女御禝子女王）
1292　風吹かば嶺に別れん雲をだにありしなごりの形見とも見よ（家隆）
1295　忘れ行く人ゆえ空をながむればたえだえにこそ雲も見えけれ（範兼）
1302　うらみ侘びまたじいまはの身なれども思ひなれにし夕暮の空（寂蓮）
1318　ながめてもあはれとおもへおほかたの空だにかなし秋の夕暮（鴨長明）
1369　中空に立ち居る雲の跡もなく身のはかなくもなりぬべき哉（詠み人知らず）
1412　あはずしてふるころほひのあまたあれば遥けき空に詠めをぞする（光孝天皇）
1806　夕暮は雲のけしきをみるからに詠めじと思ふ心こそつけ（和泉式部）

以上の新古今集の 19 首中、863,864 は離別歌、959 は羈旅歌、608 は冬歌、最後の 1806 は雑歌、残り 14 首は恋歌である。新古今集が理想とした余情･優美･幽玄と、それを表現する様式･技法は、少ないながらも上記の引用歌の中に見て取れよう。千載集の「姿さび」の詠風は、西行（1193）、俊成（1107）の引用例に、選者たちの美意識

は寂蓮（1302）、通具（1135）の歌にその片鱗が見受けられる。俊成女（608）、家隆（1292）は、余情妖艶の体を巧緻に詠み出している。歌が「闌(た)けた」のである。

技法的には新古今時代までに定着した初句切れ（864、1106、1142、1302）、二句切れ(1081、1193、1318、1369)、三句切れ（608、1107、1249、1292、1295、1412、1806）で、歌の流れを途中で一回切ることによって、一首に屈折と、同時に余情をもたらすことが出来るようになった。 だが、一首を中途で切ることは、上の句と下の句の新しい連結･融合の試行を必要とすることになり、その解決法の一つとして、作者たちは、倒置法や補足説明といった語法上の工夫、あるいは懸詞･縁語の多用を余儀なくされるようになる。句切れだけでなく、「風かよふ寝覚めの袖の花の香にかおる枕の春の夜の夢(112 俊成女)」、「かへりこむ昔を今と思い寝の夢の枕に匂ふ橘(240 式子内親王)」の例歌のように、余情はまた、殆んど名詞ばかりで構成された一首の、言葉の継起と積層の中から立ち上ってくる。また、引用した 19 首中 8 つもある「夕暮れの空」、「空の浮雲」といった体言止めの使用と相俟って、新古今時代の歌は、複雑･精巧･洗練の色合いを増し、あるいは本歌取りで、古歌のイメージや象徴的表現で、自分の歌に余情を盛りこみ、また或る時は、古今集時代にも勝って言語レベルでの知的遊戯をも愉しむことが出来た。

最終的に、問題の古今集の 484 番「夕暮れは雲のはたてに物ぞ思ふ」に立ち戻る前に、まだ微妙な疑義が残っている以下の五首と、その問題点に触れる。

（1）天雲の遠隔の極わが思へる君に別れむ日近くなりぬ（万･4247 阿部老人）

（2）五月雨(さみだれ)に物思ひをれば郭公(ほととぎす)夜ぶかく鳴きていづちゆくらむ (古･153 友則)

（3）はかなくて過ぎにし方を数ふれば花に物思ふ春ぞへにける（新･101 式子内親王）

（4）天の原そこととも知らぬ大空におぼつかなさを嘆きつるかな（新･1410 天暦御歌）

（5）あわずしてふるころほひのあまたなれば遥けき空に詠めをぞする（新･1412 光孝天皇）

(１)は、「天雲の遠隔の極みに向かって吾思う」とも読めそうで、「雲の果てに向かって物思う」という「雲の果て」説を掩護するかに見える。だがよく見ると、この歌は遣唐使として入唐に際し、阿部老人（おきな）が、母に「天雲の果てが遠く広いように、大切に思い慕っている母君にお別れする日が来た」と、詠み贈った離別の歌で、「遠隔の極」は、天雲の果て、と方向を指す語でなくて、広く遠く思うという比喩表現なのであ

る。
（2）は古今集夏歌に、(3）は新古今集春歌下にある。友則歌の「五月雨に物思ひ」、式子内親王歌の「花に物思ふ」が、ともに「雲の果たてに物ぞ思ふ」と言い回しが似ている。もし、「花に（向かって）物思う」ことが出来るなら、「雲の果たてに（向かって）物ぞ思ふ」ことも可能であるとしなくてはならない。微妙な疑義が残っていると言ったのはこの意味においてである。しかし、そうでないことを論じるのが、次の章である。
（4)、(5）も、基本的には（2)、(3）と同じで、「物思う」が、「空に.....嘆く、詠(なが)める」と換わっただけのことである。

次章では、まず、(2)～(5)の代表に式子内親王歌を取り上げ、「花に物思う」が、正確には、「花に向かって物思う」でも、「花のように物思う」でもないことを、第二に、新古今時代では「嘆く、詠める」が、「物思う」と並行して、あるいは同義語的に使用されるようになっていたことを、引用歌を増やして論じたいと思う。

六

新古今集を中心に、古今集 484 番での「雲のはたてに」という言い回し、それに「物思う」と同じ表現、またはそれに類する表現を含むものを選び集めて、三つのグループに分類した。まず、《A》「.....に物思う」を持つもの、《B》「.....を詠める（を侘びる)」と表現するもの、《C》「雲の果たてに、居る･住む」と歌ったものの三つである。

《A》「. . . . . に物思う」
(a）(b)は、以前引用したものの繰り返しであるが（C） との比較対照のため再録した。

（a) 万葉集
122　大船の泊つる泊りのたゆたひに物思ひ痩せぬ人の児ゆえに
125　橘の蔭履む路の八衢に物をぞ思ふ妹に逢はずて
2247　秋の田の穂向きの寄れる片寄りにわれは物思ふつれなきものを
3022　行方無み隠れる小沼の下思にわれそ物思ふこのころの間
3511　青嶺ろにたなびく雲のいさよひに物をそ思ふ年のこのころ
4247　天雲の遠隔の極わが思へる君に別れむ日近くなりぬ

（ｂ）古今集
481　初雁のはつかに声を聞きしより中空にのみ物を思ふかな
484　夕暮れは雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて

508　いで我を人なとがめそ大舟のゆたのたゆたに物思ふころぞ
566　かきくらし降る白雪の下消えに消えて物思ふころにもあるかな
583　秋の野に乱れて咲ける花の色の千種に物を思ふころかな

（ｃ）新古今集
101　はかなくて過ぎにし方をかぞふれば花に物思ふ春ぞへにける（式子内親王）
1017　いくかへりさき散る花を詠めつつ物思ひくらす春にあふらん　(能宣)
1026　秋風にみだれて物は思へ共萩の下葉の色はかはらず　(高光)
1033　おもいつつへにける年のかひやなきただあらましの夕暮れの空　(太上天皇)
1045　郭公声をばきけど花のえにまだふみなれぬ物をこそおもへ　(法成寺入道)
(♠）1064　時雨ふる冬のこのはのかわかずぞ物思ふ人の袖はありける　(詠み人知らず)
♠1066　あるかひもなぎさによするしら浪のまなく物思ふ我が身なりけり　(景明)
1106　詠め侘びそれとはなしに物ぞ思ふ雲のはたての夕暮れの空（通光）
(♠）1141　いくよわれ浪にしをれて貴舟(きふね)川袖に玉ちる物思ふらん（太政大臣）
♠1257　さらしなや姨捨(おばすて)山の有明のつきずも物を思ふ比(ころ)かな（伊勢）
1269　物思ひて詠むる比の月の色にいかばかりなる哀そうらん（西行）
1293　いわざりきいまこんまでの空の雲月日へだてて物おもへとは（太政大臣）
1307　あはれとてとふ人のなどなかるらん物思ふ宿の萩(おぎ)の上風(うはかぜ)（西行）
1379　いかにねて見えしなるらんうたたねの夢より後は物をこそ思へ（赤染衛門）
1401　いかにしていかにこの世にありへばかしばしも物を思はざるべき（和泉式部）
♠1430　秋の田の穂向けの風のかたよりに我は思ふつれなき物を（詠み人知らず）

《Ｂ》「.....　を詠める（侘びる･嘆く）」
（古今集）
476　見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮さむ　(業平)
743　大空は恋しき人の形見かは物思ふごとにながめらるらむ（酒井人真）
784　天雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめには見ゆるものから（紀有常）
798　我のみや世を鶯と鳴き侘びむ人の心の花の散りなば（詠み人知らず）

（新古今集）
149　花は散りその色となく詠むればむなしき空に春雨ぞふる（式子内親王）
959　都をばあまつ空とも聞かざりき何ながむらん雲のはたてを（宣秋門院丹後）
1017　いくかへりさき散る花を詠めつつ物思ひくらす春にあふらん（能宣）
1106　詠め侘びそれとはなしに物ぞ思ふ雲のはたての夕暮れの空（通光）
1295　忘れ行く人ゆえ空を詠むれば絶えだえにこそ雲も見えけれ　(範兼)

1107　思ひあまりそなたの空を詠むれば霞を分けて春雨ぞふる（俊成）
1133　なき名のみ立田の山に立つ雲のゆくへも知らぬ詠めをぞする（光孝天皇）
1806　夕暮は雲のけしきを見るからにながめじと思ふ心こそつけ（和泉式部）
1318　ながめてもあはれとおもへ大方の空だにかなし秋の夕暮れ（鴨長明）
. . . . . .
1009　煙立つ思ひならねど人しれず侘びてはふじのねをのみぞなく（深養父）
1078　あまのかるみるめを浪にまがへつつ名草の浜を尋ね侘びぬる（俊成）
1106　詠め侘びそれとはなしに物ぞ思ふ雲のはたての夕暮れの空（通光）
1302　うらみ侘びまたじいまはの身なれども思ひなれにし夕暮れの空（寂蓮）
1295　忘れ行く人ゆえ空を詠むれば絶えだえにこそ雲も見えけれ　(範兼)
1320　消え侘びぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしのもりの白露（定家）
1370　雲の居るとお山鳥のよそにてもありしときけば侘びつつぞぬる（詠み人知らず）
1393　思ひ侘びみし面影はさておきて恋せざりけんをりぞ恋しき　(俊成)
1417　初鴈(かり)のはつかの聞きし言づても雲ぢに絶えて侘ぶるころ哉（西宮前左大臣）
1423　よのうさも人のつらさも忍ぶるに恋しきにこそ思ひ侘ぬれ（元眞）
. . . . . .
1035　忘れては打嘆かるる夕かな我のみしりて過ぐる月日を（式子内親王）
1124　夢にてもみゆらん物を嘆きつつうちぬる宵の袖のけしきは（式子内親王）
1410　天つ空そことも知らぬ大空におぼつかなさを嘆きつるかな　(村上天皇)
1411　嘆くらん心を空に見てしかな立つ朝霧に身をやなさまし　(女御徽子女王)

《C》「雲のはたて(天つ空)に居る・住む」

（古今集）
751　久方の天の空にも住まなくに人はよそにぞ思ふべらなる（元方）

（新古今集）
864　これやさは雲のはたてにおると聞くたつ事しらぬあまのは衣　(寂照)
cf. 863　きならせとおもひし物を旅衣立つ日をしらずなりにけるかな　(詠み人知らず)

864 の寂照歌は、技巧の歌である。寂照が入唐の際、知人が旅衣を餞別にしようとしたが、すでに出発していたので、追いかけて、863 の歌を詠んだ。「きならせ」には、「来馴らせ･着馴らせ」が懸けてあり、「立つ日」は、旅衣から「旅立つ日」であった。寂照歌は伊勢物語 16 段から天の羽衣を本歌取りして、古今集の 484 番も念頭に置いて、「雲のはたてにおる」を、「雲(天人)の機で織る」と「雲の果たてに居る」と両義に懸け、更に「たつこと知らぬ」に、「裁断することのない天衣無縫の天の羽衣」と「旅立つこ

とを知らなかった」と懸ける機知を尽くした歌であった。ここでは、「雲のはたて」は「居る」と使われている。

「に物思う」という表現形式は、《A》表で見る如く、万葉期に全盛を謳歌し、古今集でも詠み人知らず、六歌仙時代、選者時代と一貫して愛好されてきた序詞を主体とする「寄物陳思」の作歌形式であった。古今時代にこの序詞が衰えだし、「に物思う」の使用も減衰し、修正を蒙ることとなった。新古今時代になると、「寄物陳思」的歌は激減する。《A》（c）の「物思う」と詠む新古今集 17 首中で、はっきり「寄物陳思」の形を保っているのは、♠印を付した 1066,1257,1430 の三例、及び類似表現である（♠)印の 1064,1141 の二例、合わせて五例で、全体の三分の一に減っている。残りの歌では、景物は、物思いを誘発する契機（切っ掛け）として働いている。「更科や姥捨山の」と枕詞的呪力で、物思いに導かれていた 1257 での作者の心の動きは、1430 では、穂向けの風、1307 では萩の上風によって触発され、新しい形での物思いに変貌している。この濫觴は、古今集にあった。古今集の選者だった忠嶺の「風吹けば峰に分るる白雲の絶えてつれなき君が心か（601)」や、躬恒の「ひとりして物を思へば秋の夜の稲葉のそよといふ人もなき(584)」では、「白雲」「稲葉」という景は、心を「興す」というより、ともに「つれない恋人」の代名詞であり、ここでは景は心緒と融合し、両者は殆んど一体化している。また、「夕されば蛍よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき(562)」の友則歌では、蛍は景を心に取り込むいわゆる「有心の序」であったし、心の分身とも言いうるものになっていた。554 の小町の「いとせめて恋しきときはうばたまの夜の衣を返してぞ着る」では、夜の衣はもはや物思いの比喩ではなくて、夢での出会いを希う思いそのものが形をとったもの、シンボルに近くなっている。

式子内親王の 101「はかなくて過ぎにし方を数ふれば花に物思ふ春ぞへにける」でも、花は単に外なる景に留まらず、それを契機として内なる思いを誘発するものである。ここでは、散る桜は、内親王にとって、外なる景であると同時に、斎院として儚く過ぎた若かりし年月への思い、心象風景でもある。「花に物思う」には、古今集での、「色見えで移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける(797 小町)」の「人の心の花」の場合より、「花」と「物思い」は、より分かちがたく緊密に結合しているので、この点をもう少し敷衍してみたい。101 番に近似する幾首かの歌が、新古今集に近接して見出される。

100　いくとせの春に心をつくしきぬあはれと思へみ吉野の花(竣成)
101　はかなくて過ぎにし方を数ふれば花に物思ふ春ぞへにける（式子内親王）
149　花は散りその色となく詠むればむなしき空に春雨ぞふる（式子内親王）
　　本歌　暮れ難き夏の日ぐらしながむればそのこととなく物ぞ悲しき　(伊勢物語)

1017　いくかへり咲き散る花を詠めつつ物思ひくらす春に会うらん(能宣)
1106　詠め侘びそれとはなしに物ぞ思ふ雲のはたての夕暮れの空(通光)
1107　思ひあまりそなたの空を詠むれば霞を分けて春雨ぞふる(俊成)

最初の「花」の語をもつ四首は、散る桜を眺めて、作者が、桜花に自身の過ぎ去った歳月を重ね合わせて、思いを述べた惜春の賦である。どれも桜という目に見える形象の中に、目に見えない心緒をこめる伝統的手法だが、形象に触発されて心がどう動き、その動きをどう表現するかに関して、新古今時代には再び変革が起こっていた。変革は「心」(創作態度)、「姿」(歌の風体)、「詞」(修辞)への新工夫となり、当時の歌合せの判詞によれば、夫々、「心」深く・高く、「姿」長高く･寂びて、「詞」をかしく・優に、であることを理想としていた。

149 では、外なる景は、散る花、その色、むなしき空、春雨と分解され、伊勢物語の本歌取りで蘇武の故事まで含めた「そのこととなく物ぞ悲しき」を背景に、(註 11)「その色となく詠める」と、再び一連の景に構成し直され、惜春の思いが「春雨」や、「散る花」と、優艶な詞に凝縮され象徴的に表現されている。101 でも、散る桜に触発されて、儚く過ぎた青春が、そして桜の儚く散り過ぎた春が、殆んど「花」の一語に凝縮される。この二首の式子内親王歌では花、空、春雨は、そしてとりわけ花は、逝く春、愛惜すべき過去を想起させる契機となるもの、否、殆んど、花は逝く春・過ぎにし方と同義語であり、物思いの象徴となっているといってよかろう。これが「花に物思ふ」の内容であって、そして大事なことは、物思いの内容、そして表現がこのように凝縮され、象徴化されるのは、新古今時代になってから初めてだということである。

尚、六首から見て取れるように、「詠める」という新概念が、「物思う」と、同じ一首の中に並存していたり(1106,1107)、「物思う」に取って代わったりする(149)。さらに、「侘び」、「かなし」、「嘆き」などのより新しい美意識も追加される。《B》表にあるように、「物思う」から「物を詠める」、「詠め侘び」への<移項>が進行していた。新しい発想、新しい景の取り扱い、一言でいえば、新しい感性が育っていたのだが、この時代では、問題の「雲のはたて」を三回とも、「雲の果たてを眺める」と詠んでいる。あと一例は、《C》の「雲の果たてに居る」と詠んでいることはすでに述べた。

跋

以上、古今集、新古今集での「雲のはたて」の検証は終わった。古今、新古今とも、古今集 484 を本歌取りした古今集 751、新古今集 959,1106 を含めて、すべて「雲の果たて」と詠んでいるのである。しかし、だからといって、古今集の 484 が、「雲の果たてに物思う」と詠まれた、もしくは、そう読むべきだということにはならない。反対に、

「雲の果たてを眺める」としか発想･表現されていないということは、「雲のはたてに物思う」の「はたてに」は、「果たてに」でなくて、「旗手に」であるということになる。

一方、式子内親王歌の「花に物思う」を根拠に、「雲に物思う」も成立すると論じる人もあるかもしれないが、雲･夕暮れに触発されて、物思い、あるいは侘びるのは、新古今時代あるいはそれ以後の発想であり、それを、まだ限りなく万葉的発想に頼っていた古今集詠み人知らずの時代まで遡らせることは無理なのである。もし、仮に百歩譲って、「雲に物思う」ことがあったとしても、「雲のはたてに物思う」ことは、ありえなかった筈である。万葉集 4247 の「天雲の遠隔の極(のように、遠く広く)思う」と同様に、484 番も、「雲の旗手に(乱れる旗手のように)物思う」と読むべきである。また新古今集 1106 で、通光が、「詠め侘びそれとはなしに物ぞ思ふ雲のはたての夕暮れの空」と、はっきり二通りに詠みわけたように、「雲の果て」は詠め侘び、「それとはなしに」物思いすべきなのである。

終り

2007 年　5 月

註

１　古筆の一つ本阿弥切「なつかげ」は、第一句を、「夕暮れの」とする。第三句は、「物ぞ思ふ」と一字字余り。第二句を、「雲の旗手」と読むときの「手」は、厚手、奥手の如く、同種類の中の特定の種類を言う。

２　竹内寛子『古今集の世界へ　空に立つ波』　朝日選書　1996　pp.126-134

３　山下道代　『古今集　恋の歌』　筑摩書房 1987　pp.16-18、p173

４　「朝影にわが身はなりぬ玉かぎるほのかに見えて去にし子ゆえに」が、巻十一 2394「正述心緒」と、巻十二 3085「寄物陳思」の両方に載せられている。

５　青木正子　『万葉集集成 7 』「万葉集の正述心緒歌」　平凡社　昭和 29　p.145

６　小沢正夫　『古今集の世界』　塙書房　昭和 36　pp.9-104

７　嘗て、688 の英語訳のカードが、アメリカの友人ナオミ･ミラーさんから送ってきて、英語訳がおかしくはないかと訊かれた。カードには、Do not smile to yourself　Like a green mountain　With a cloud drifting across it　People will know we are in love とあった。下線部を直して、Do not smile at me so distinctly　Like a white cloud Drifting across a blue mountain　People will know we are in love ではどうでしょうと回答した。「吾と笑まして」を、「独り笑まして」と読んだアメリカ人翻訳者の西洋論

理的発想に同情したと同時に、外国文学を理解することの困難さを自戒をこめて思い知らされた。

８　伊勢物語十九段「天雲の」では、同じところで宮仕えしていた男女が、恋仲になり、やがて別れる。職場で毎日顔を合わせるが、無視する男に女が「天雲のよそにも人のなりゆくか」と、恨みを詠みおくると、男が「天雲のよそにのみしてふることはわがゐる山の風はやみなり」と、別れた原因はそちらの身持ちの悪さだと返したとなっている。

９　伊藤博　『万葉集相聞の世界』　塙書房　昭和 34　pp.20-39

10　風巻景次郎　『風巻景次郎全集６　新古今時代』　桜楓社　昭和 55　pp.67-72

11　伊勢物語 45 段「ゆく蛍」、身分ある娘が、ある男に恋わずらいをして、死ぬ間際に、親に打ち明ける。知らせを受けて、男が駆けつけるが、娘は死ぬ。喪に服していた男は、夜更けに蛍が空高く飛ぶのを見て詠む。

ゆく蛍雲の上までいぬべくは秋風ふくと雁につげこせ

暮れ難き夏の日ぐらしながむればそのこととなく物ぞ悲しき

引用文献･参考文献

『萬葉集』一～四　日本古典文学大系　岩波書店　昭和 46

『古今和歌集』日本古典文学全集　小学館　昭和 55

『新古今和歌集』日本古典文学大系　岩波書店　昭和 51

『国歌大觀』歌集･索引全 4 巻　松下大三郎･渡辺文雄編　角川書店　昭和 38

『萬葉集大成 7 』様式研究篇･比較文学論　平凡社　昭和 29

『萬葉集研究』第二集　五味智英･児島寛之編　塙書房　昭和 48

『萬葉集相聞の世界』塙選書 3　伊藤博　塙書房　昭和 34

『古代和歌の世界』筑摩新書 191　鈴木日出男　筑摩書房　1999

『中世和歌史論』塙選書 1　久松潜一　塙書房　昭和 53

『古今集の世界』塙選書 12　小沢正夫　塙書房　昭和 53

『伊勢物語上』訳注阿部俊子　講談社学術文庫　2006

『古今和歌集』日本文学研究叢書　有精堂　昭和 54

『古代の和歌言説』吉野樹紀　翰林書房　2003

『新古今和歌集』日本文学研究叢書　有精堂　昭和 55

『古今集新古今集の方法』浅田徹･藤平泉編　笠間書店　2004

『新古今時代』風巻景次郎全集 6　風巻景次郎　桜楓社　昭和 55
『恋歌の風景　古代和歌の研究』菊池威雄　新典社　平成 13
『新古今歌人の研究』久保田淳　東京大学出版会　1978
『中世和歌の研究』錦仁　桜楓社　平成 3
『和歌史－万葉から現代短歌まで－』　神野志他編　和泉書院　1998